

《新世界》から発信されたドヴォル
ジャークの手紙と当時のアメリカ

その
23

半場 久也



(カットも筆者)

アロイス・ゲープ
ル宛て(原注・一八四
一年〜一九〇七年、音
楽好きのシフロヴの領
主カミール・ローハン
に、秘書として使え

後に土地管理人をしていた。多面的
な音楽家で歌手。長い間、ドヴォル

ジャークの友人であり、彼の子供達の名
付け親。

ニューヨーク、一八九四年二月二十七
日。『大切な友! 気高い方 三倍にも
気高い方!』

やっとのことで、一年以上も長い間待
ちがれていたあなたの手紙を受け取り
ました。どんなに私は感動したことし
よう! それが私だけではいいのです。

全員、オティルカも母親も階段を駆け降
りてきたのです。私はサロンに座って弾
いていたのです。

一体なんだと言つのか? 誰から来た
手紙? それはまるで私は叫び声を上げ
たのです。シフロフからだ! と、おお、
どんなに憧れて、震える手で私はあなた
の手紙を開いたことでしょう。そして二
回行われたのです。オルティガが先ず高
い声を張り上げて読みました。その後、
私です。私はあまり嬉しすぎて、あな
たに手紙を書くことが出来なくなりまし

た。ということば、あなたは御自分では
理解出来ないよつな多くの喜びを私に与
えたのです。

私はあえて申し上げますが、この嬉し
さについて、心から感謝します。あなた
の手紙を読んで、あなたが私や家族が当
地でどの様に暮らしているかご存知だと
いうことが分かりました。お陰さまで
我々は元気でして、確かに沢山の心配事
を抱えています。が、あまり気にかけては
おりません。そのことは乗り越えねばな
りません。

ご存知の通り、学校の仕事ですが、私
は全く真面目にやっております。私は一
曲の交響曲を書きました。それは全アメ
リカを握り起こしたものです。他に一曲
の弦楽四重奏曲とヴィオラ二挺の入った
弦楽五重奏曲を書いたのです。四重奏曲
はハ長調で五重奏曲は変ホ長調です。一
月にここで《ドヴォルジャークの夕べ》
が行われました。ボストンから有名な四

重奏団がやってきたのです(クナイゼル氏の四重奏団です)。そのほかに六重奏曲が演奏されました。

聴衆は交響曲の時と同じく興奮していました。私の妻と私は聴衆の中に座っていたのですが、その晩は何回自分の席から立ち上がって、興奮した聴衆に新作が大変受けたことに対して感謝の意を表わさねばなりませんでした。これら三曲に私は厚かましくも私の作った最良で独創的なものとして印を

確固たる地位と不朽の名声獲得

のです。全ての批評も同じように見

ています。ニューヨークの新聞は、次のごとく書いています。「ドヴォルジャークが当地アメリカで、この様なものを書くことが出来るのであれば、何故この人はもっと早くここへ来なかつたのだらう」と。

仲直りをしました。このことをあなたは良く知りませんね。彼は私の持つている全てを買って、更に私が新しく書く全てのもの欲しがっているのです。新聞で見た通り、序曲は三曲とも出版されました。《ドウムキー》やチェロ用のロンドもです。

ブラームは個人的な親切から、これらの作品全てに目を通してくれました。感謝しています。彼はジムロックに手紙

を出して、私のことをよろしくと頼んでくれ、私の《好ましい作品》のことを喜んで書いてくれました。どんなに彼がジムロックへの手紙の中で確的に伝えてくれたことが、この交響曲と四重奏曲と五重奏曲をジムロックは買ってくれましたが、出版されるのは夏になつてからです。

あなたが全ての作品を手に入れること

については、私が面倒を見ましょう。恐らく年内に私があるに個人的に手渡すことになります。というのは、今年ボヘミアへ帰る積もりだからです。そのことについては、後程お知らせします。我々は大体五月十五日に出发し、五月二十六日にはブラーハに着くでしょう!

シフロウについては、それにしても悲しいことです。その変化があらゆるものを奪ってしまいました。私はそれらの全

てを新聞で読み、この善良な老人が最早存在しないことを残念に思っています。

たけれどもあなたがそこにいらして、以前と同様、そこが気に入っていることは喜ばしいことです。私はしばしばシフロウのことを思い出しています。夕食の時どんなにしばしば子供達、特にオティルカにその事を話すでしょう。あなたや皆さん達と一緒に幸福な時を過ごした曾てのことを、そして下のシャイブルさんの客間で小さなオティルカが歩くことを

覚えた時のこと！

これは私が生涯忘れることの無い思い出なのです。マシエク氏と彼の奥さん、それにヴィーリン氏によろしくお伝えください。私は心からあなた方に挨拶をおくります。

また手紙をくれますか？ 私はぎつと出します。』

コメント この手紙の宛先人は注釈から察すると、また手紙を手にした時の家族の喜びから察すると、ボヘミアのシフロウという地方に住んでいる、ドヴォルジャーク家にとって非常に大事な人物であることが分かる。シフロウという名の地名を、各地方別のヨーロッパの詳細な地図で辿ったが、遂に発見出来なかった。ドヴォルジャーク一家が昔から、少なくとも長女が赤ん坊のころから遊びに行っていた先だったのである。シフロウの老人とは誰のことが不明である。

文中、ピアノのための組曲を最近完成

させた」とあるのは、イ短調作品九八と思われる。これは一八九四年二月十九日から三月一日にかけて作曲されたと言われている。ただし以前は作品一〇一番になつているとか、だとすると、この手紙を書いた時点では、殆ど出来上がつていただろうけれど、完成間近と言つてと察せられる。

また、「これら三曲に私は厚かましくも……」とある個所に注目していただきたい。勿論《新世界より》と《アメリカ》と弦楽五重奏曲を指しているが（訳注・内藤の著書によれば、この最後の五重奏曲も《アメリカ》というタイトルが付いている）、これらの曲は作曲家も手紙に書いている通り、聴衆の絶大な反応があつた。要するに、この時点で、作曲家はその人気の頂点に達していたのである。その結果、彼の音楽上の名声は、その後全世界に轟き、確固たる地位を音楽史上不朽なものにした。

(つづく)

通巻600号記念
夏季号の原稿募集

1957年9月にスタートした本誌もいよいよ600号を迎えます。500号から11年かかってしまいました。区切りごとの企画を振り返りますと、「医家芸術に望む」といったものが多かったです。

今回も極めて困難な状況にあるからこそ、クラブや機関誌がどこもあるべきなのか、辛口のご意見を給りたいと存じます。多数の会員からの声をお聞かせください。

その他 随想・単価・俳句・川柳等はいつもとどおりです。

締め切り 7月10日(土) 発行は下旬を予定しています。